

令和 5 年 5 月 24 日現在

機関番号：82628

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12950

研究課題名(和文) 障害者が経験する社会的排除の定量化に向けた社会学的障害統計の開拓

研究課題名(英文) The Development of Sociological Disability Statistics for Quantifying Social Exclusion against Disabled People

研究代表者

榊原 賢二郎 (Sakakibara, Kenjiro)

国立社会保障・人口問題研究所・社会保障応用分析研究部・室長

研究者番号：90803370

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：各種障害種別と社会的不利の関連を統計分析し、次のような業績を上げた。(1)南関東から無作為標本抽出で選ばれた回答者が、各種障害種別に伴う社会的不利をどのように評価しているかを郵送調査で調べ、英語論文(掲載決定)、国際・国内学会報告としてまとめた。(2)2011年アイルランド国勢調査個票データを二次利用して、各種身体機能の制限と就労状況の関連をロジスティック回帰によって推定し、英語論文、国際・国内学会報告としてまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

障害者の社会的排除がどの程度存在するかを統計的に示すことは、障害者施策の基礎資料ともなる重要な課題であり、国連障害者権利条約でも発展が求められている。しかし、障害者内部の多様性、例えば障害種別まで考慮した精度の高い分析を行おうとすると、各種別に該当する障害者数が少なく、分析手法を開拓する必要がある。本研究では、こうした学術的・社会的課題を、(1)職業威信を踏まえた主観的方法、(2)大規模調査データの二次利用に基づく客観的方法を採用することによって解決し、社会統計の一環としての障害統計の深化に貢献した。

研究成果の概要(英文)：Based on the analysis of associations between various disability types and social disadvantages, the following papers were published/presented. (1) A postal survey explored the extent to which randomly sampled respondents from the Southern Kanto District of Japan assessed social disadvantages accompanying various disability types. The results were accepted as an English article and presented at international and domestic academic conferences. (2) Using the microdata of the Irish census 2011 in a secondary analysis, correlations between limitations in different bodily functions and employment status were estimated through logistic regression. The results were published as an English article and presented at international and domestic academic conferences.

研究分野：障害社会学

キーワード：障害統計 社会的排除 障害種別 職業威信 質問紙調査 IPUMS-International

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

障害者がどの程度社会的排除・不利益(例えば失業や貧困など)を経験しているかを統計的に解明することは、障害者施策の基礎となる重要な研究領域である。しかしこの種の障害統計はまだ十分に発展しているとは言い難い。例えば、失業や貧困などと障害の関連を分析する際、障害者内の多様性、とりわけ障害種別を考慮した上で、更に教育や出身階層・エスニシティなどを統制するような研究は未発達であった。また、階層研究の「主観的方法」、つまり人々の意識を通じた研究手法は適用されていなかった。

障害者の詳細な社会統計が十分発達していない背景には、障害者が人口中の少数派であることがあると考えられる。この層をさらに障害種別に分割すると、各種別に該当する人数は少なくなり、社会生活の状況との有意な関連は見出しにくくなる。こうした標本数の問題をどう乗り越えるかが課題になってきたと考えられる。また、こうした数の少なさも影響してか、障害に関する詳細な情報を含む調査データ自体が少なく、学術研究で二次利用できるデータは更に限定される状況がある。

## 2. 研究の目的

本研究は、社会統計の一部としての障害統計を発展させることを目的とした。具体的には、第一に、障害という現象の内部にある多様性、とりわけ障害種別間の多様性を考慮した統計分析を目指した。障害と一口に言っても、日本における三障害(身体障害・知的障害・精神障害)であれその他の分類であれ、異なる障害種別を含んでおり、障害者が経験する社会的排除の度合いも多様でありうる。更に加えれば、各種障害を持つ人と障害を持たない人の中には、年齢や性別などの基本属性が異なる可能性も考慮する必要がある。そのため、こうした基本属性を統制しつつ、種別に分解した障害を投入して多変量解析を行うことを目指し、その際問題となる標本数の問題を乗り越えられる方途の検討を課題とした。

第二に、社会統計の手法を障害統計に導入することで、障害者の社会的排除・不利益を多面的に明らかにすることを試みた。これに関しては、障害とその他の文脈、とりわけ階層研究を架橋することで、障害統計の新たな可能性を模索した。とりわけ、既存の社会統計の手法を参照しつつ、少ない標本数で各種障害の社会的不利の一端を明らかにできるよう、新たな調査方法論の開拓を目指した。

## 3. 研究の方法

本研究では、社会統計としての障害統計の方法論として、(1)健常者を含む人々の各種障害に対する評価を調べる「主観的方法」と、(2)各種障害を持つ障害者本人の状況に即した「客観的方法」を採用した。

### (1)主観的方法

人々が各種障害に伴う社会的不利益をどの程度に見積もっているかについて、無作為抽出による質問紙調査で解明した。調査は調査会社に委託して実施した。人々の評価をスコア化するとともに、評価の構造を分析した。

この方法では、回答者は健常者を含む無作為標本で良く、回答者に各種障害者が多数含まれることを前提としない。そのため、通常为社会調査の規模で、各種障害の社会的不利を評価できる。また、単独の調査で多数の障害種別について質問することができる。

### (2)客観的方法

見えづらさや聞こえづらさなどの各種身体的条件(日本の障害者手帳の分類とは必ずしも一致しない)が、社会的不利益と実際にどの程度関連しているかを、外国の国勢調査個票データに基づいて分析した。個票データは、国勢調査データベース IPUMS-International から入手した。障害関連項目を含むデータとして、アイルランド国勢調査個票データを用いた。性別や年齢等諸属性を統制しながら多変量解析を行なった。

この方法では、数十万件規模の大規模なデータを用いることで、標本数の問題の乗り越えを図った。これにより、障害種別ごとに見ても、それぞれの種別に統計分析可能な程度の該当者がいる状況を作り出すことができると考えられる。この種の調査データは、障害者に限定した調査とは異なり、健常者と比較した各種障害者の社会的不利を解明することを可能にする。

## 4. 研究成果

### (1)主観的方法に関する成果

平成30年度に「社会生活・家庭生活と身体についての意識調査」と題する郵送調査を実施した。この調査は、33の身体的条件の社会的不利を1から6で評価してもらったものであり、階層研究における職業威信、即ち各種職業の社会的地位に対する人々の評価を測定する方法を参考にしている。南関東の住民基本台帳から、標本数1000件が無作為抽出された。有効回答253件、有効回収率25.3%であった。医療専門家以外による評価を可能とするため、診断名ではなく、日常用語で各種身体的条件を表現し、最も程度が大きい状態を用いた(例:「視覚障害」ではなく「目が見えない」)。

社会的不利の評価は、身体的条件により大きく異なっていた。6段階評価を0から100に変換して平均を算出すると、「目が見えず、耳が聞こえない」では95.81、「髪の毛がない」では30.00であった。感覚障害・知的障害が高く、精神障害に相当する条件は全般的には中程度、容貌の異形は軽度に評価されていた。平均の算出以外に、周辺累積ロジットモデルによる評価水準の数値化を行ったところ、平均値に基づく結果とほぼ一致した。

評価に対する回答者の性別・年齢などの基本属性の関連を、順序ロジスティック回帰などで分析したところ、属性は概ね有意に影響しておらず、安定した測定であったと考えられる(この点は職業威信において従来行われていた分析とは異なり、本研究では、集合間の相関ではなく、個別の回答者の水準での評価と属性の関連を分析した)。

また、多次元尺度構成法という手法を使い、各種身体的条件の不利の評価の間の近さ・遠さから評価構造を分析した。評価の絶対水準を捨象した相関の度合いに基づく距離を用いた結果、身体障害・精神障害・容貌の異形がそれぞれクラスターを形成していたが、身体障害と精神障害の間に、読字障害・記憶障害などを含む群と、痛み・疲労の群が見出された。本調査を基にした論文では、これらのクラスターを、身体の諸側面に関する基本的な感覚、即ち能力・秩序/調和・外観を示すものとして解釈した。

本調査で得られた各種障害に関する不利の評価を分析し、学会発表するとともに(榭原 2019; Sakakibara 2021)、英語論文として投稿し、掲載が決定した(*Social Science Japan Journal* 掲載決定論文)。

### (2)客観的方法に関する成果

2011年アイルランド国勢調査では、視覚障害や聴覚障害、肢体障害や知的障害など、7種類の障害種別の有無を質問している。これと就労状態の関連を、性別・年齢などを統制したロジットモデルを用いて分析した。結果は、いずれの障害種別も就労機会における不利、即ち就労に対する非就労(失業・就労不能を含む)の増加と有意に関連していたものの、その関連の強さには著しい相違があった。例えば、就労中とそれ以外に二値化した就労状況を、性別・年齢(2次式)・身体機能の各種制限で説明するモデルでは、聴覚障害の不利は比較的軽く(就労のオッズ比0.73)、肢体障害(オッズ比0.21)・心理情緒障害(オッズ比0.23)・知的障害(オッズ比0.36)はより低い就労機会に関連していた。

客観的方法に属する業績としては、上記分析に基づいた英語論文が掲載された(Sakakibara 2019 (*Irish Journal of Sociology* 掲載論文))ほか、学会報告も行った(榭原 2018; Sakakibara 2018)。

また同じデータを用いて、ジェンダーと障害の交叉性(intersectionality)について、障害種別にまで踏み込んで分析し、学会報告した(Sakakibara 2019 (East Asia Disability Studies Forum 報告))。就労機会および職業種別を従属変数とするロジットモデルに交互作用項を投入したものの、一部を除いて有意な交互作用は見られなかった。この分析においては、ジェンダーによる不利と障害種別による不利は概ね加法的(障害と性別の効果が単純に足し合わされる)であったことになる。

以上のような研究成果を通じて、障害問題内部の多様性を考慮に入れつつ、障害と社会的不利の関連を分析する手法を開拓し、社会学的障害統計の深化に貢献しえたものと考えらる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Sakakibara Kenjiro	4. 巻 28
2. 論文標題 Work exclusion and disability types: The heterogeneity of disability as social exclusion in the 2011 Irish Census microdata	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Irish Journal of Sociology	6. 最初と最後の頁 65 ~ 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/0791603519872124	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榎原賢二郎	4. 巻 2018-J002
2. 論文標題 「社会生活・家庭生活と身体についての意識調査」の集計結果	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 IASS Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Sakakibara Kenjiro	4. 巻 -
2. 論文標題 Disability Prestige and Perceived Disability Disadvantage: Intersubjective Structure of Disability as a Social Disadvantage in the Japanese Metropolitan Area	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Social Science Japan Journal	6. 最初と最後の頁 (accepted)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 SAKAKIBARA, Kenjiro
2. 発表標題 Mapping Disabilities by Multidimensional Scaling: Analysis of People's Subjective Ranking of Disadvantageous Bodily Conditions
3. 学会等名 IV ISA Forum of Sociology（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Sakakibara, Kenjiro
2. 発表標題 The Interaction Effects of Disability Types and Gender on Employment: Assessing Intersectionality in the 2011 Irish Census
3. 学会等名 East Asia Disability Studies Forum (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榎原賢二郎
2. 発表標題 障害評価の社会構造 無作為郵送調査で評価された障害の社会的重度性と障害分類
3. 学会等名 障害学会第16回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kenjiro Sakakibara
2. 発表標題 Employment Status, Disability Types, and Agenda 2030: Logistic Regression Analysis of the 2011 Irish Census Microdata
3. 学会等名 World Social Science Forum 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 榎原賢二郎
2. 発表標題 障害・職業・社会階層 2011年アイルランド国勢調査個票データの分析
3. 学会等名 障害学会第15回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------